

## 蹂躪されし鬼姫の狂態体験版

「コノクソ餓鬼ガツ。生意気ヲ言イヤガツテ……。目ニモノヲ見セテヤルツ！ オイツ、オマエタチ、コイツノ着物ヲ剥イデ動カナイヨウ抑エツケロ！ 尻ヲ天ニ向ケタ状態デナツ！」

「へイツ！ ワカリマシタ、オ頭ッ！」

命令を受け、鬼たちが凜華に近づく。

ただならぬ気配を感じて、凜華が呻き声を上げた。

「な、何をするつもりだ……。や、やめる……。ッ」

しかし、その言葉によるささやかな抵抗も虚しく、太く巨大な手が何本も伸びてきて、凜華が着ている着物を掴んだ。

そして――。

ビリッ、ビリビリビリビリリッ！

「……ッ！」

布地が破ける音がして、凜華の華奢な裸体が露になった。

まだ未成熟なその身体は、所々傷つき、血が流れ、青アザが浮かんでいたが、肌は珠玉のように白く美しく、まるで唐由来の象牙細工のような華奢で繊細な身体付きをしていた。胸の肉はまだほとんど付いておらず、肋骨がするどく浮き上がっているような状態だったが、その反面、尻にはほどよく脂がのっており、まるで採れたての朝桃のような瑞々しさであった。

凜華の裸体を目の当たりにして、鬼たちが粗野で下品で下卑た声を笑いながら放った。

「へへへへ、ナンダコイツ、胸ガ無イゾ。マナ板カ？」

「ダガソノ反面、ナカナカ良イ尻シテヤガル」

「プリップリダナ。ムシヤブリツキタクナルゼ」

「ソレヨリモ見ロヨ、コイツノ尻穴ヲ」

「モノ欲シソウニヒク付イテヤガル。イマスグ挿入テクレッテ感じダナ」

「尻穴ニ欲シイノカヨ。淫乱ナ変態メス餓鬼ガツ！」

「み、見るなッ！ 見るな貴様らあああああああッ！」

尻を強調する形で突き上げられているため、まるで鬼たちによる尻の品評会といった感じだ。凜華は屈辱的な品定めを受け、恥辱で顔を赤く染めて吼えるが、身体を押さえつける鬼たちの力は強くビクともしない。

そこへ、金棒を持った羅刹が近づいてきた。

「オーオー、ドウヤラ準備ハ万端ノヨウダナ」

彼が手にする金棒は六角形で、太さは人間の太腿ほどあり、鋭く尖った棘が何本も付いており、血で錆びつき汚れていた。

それを見て、凜華の背筋がゾッと寒くなった。

「そ、それで何をするつもりだ……」

「ア？ ナンダオマエ、怖気ヅイタノカ？」

「なッ！ そ、そんなこと——」

「安心シロ、コレデオマエノ尻ヲ叩コウツテ訳ジャネエ。ソんなコトヲシタラ、一撃デ楽ニシチマウカラナ」

そう言いながら、金棒の先端部分をキュッと閉じた凜華の尻穴にあてがった。冷たい鉄の感触が、肛門の括約筋を伝って神経の中に入り込み、凜華の肌が総毛立った。

不吉な予感がして、凜華の顔が青くなった。

「ま、まさか……：貴様、ソレを——」



